

Y34c

大学生の認知率はどのくらいか？-白色矮星は4割、準惑星は5割

加藤 万里子、小林 宏充 (慶応大学)

本年年4月、慶応義塾大学の1,2生を対象に科学用語36の知識と興味度、物理・科学コンプレックスの有無などを調査し、10年前と20年前の調査結果との比較を行った。学生が科学の最新知識を得る情報源はテレビ(6.5割)、インターネット(6割弱)、新聞(4割)の順であり、10年前と比べて新聞とインターネットの順番が逆転した。

学生によく知られている用語(認知率が90%以上)は、文系学部では、ビッグバン、ブラックホール、国際宇宙ステーション、DNA、遺伝子くみかえ、体内時計、ダイオキシン、メルトダウン、地球温暖化、オゾンホールの10個であり、理工学部では、それに加えて一般相対性理論、カーボンナノチューブ、人工知能の13個であった。また、知られていない用語(認知率30%以下)は、量子効果、超弦理論、ボーズ・アインシュタイン凝縮、フラクタル、トポロジーなど文系で8個、理工で1つ(ボーズ・アインシュタイン凝縮)であった。「準惑星」の認知率は文系理系ともに54%である。ただし科学用語は知っていても、知識があるとは限らない。ビッグバンやブラックホールは知っていても、天文学をきちんと勉強すれば必ず出てくるハッブル定数や白色矮星は知らない、といった傾向がみられるのは2002年の調査結果と同じである。

10年前と比べて自然科学用語の知識度が大幅に上がり、また多くの言葉に強い興味を示すようになった。特に増えたものは、宇宙関係(ビッグバン、宇宙膨張、ダークマター、ブラックホール、超新星、一般相対性理論、ニュートリノ)のほか、カーボンナノチューブ、遺伝子くみかえ、人工知能、文系ではそれに加えて国際宇宙ステーションと地球温暖化が目立つ。これはこの10年で科学がぐっと身近かな存在になり、新聞やテレビで多くとりあげられるようになり、科学が大衆化したことのあらわれであると考えられる。